東西から見た古代インド

松枝　到 所員・表現学部教授

われわれ「東西交渉史研究会」は、以下に示すように具体的なフィールドワークをインド、パキスタンおよびその周辺諸国でおこない、文献資料からは浮かびあがらないさまざまな分野において未知の領域を踏査し、これまで調査されてこなかったさまざまな地域について多様な情報収集をおこなってきた。研究員のすべてがフィールドワークに参加することは諸般の事情から不可能ではあったものの、文献調査および歴史調査などによって実際のフィールドワークをサポートすることにより、相当に重要な学術資料を提示しえたと自負するものがある。

東西交渉史の全体において、インドはつねに重要なファクターでありつづけてきた。たとえば「シルクロード」というような語は19世紀に生まれた造語である。そのもっとも最初の例は、ドイツの地理学者リヒトホーフェン（Ferdinand Freiherr von Richthofen）の著作『中国』（*China*, 1877、第１巻）に見られる‘ Seidenstrassen ’という語であり、それを同じくドイツの東洋学者ヘルマンが『中国―シリア間の古代絹街道』（*Die alten Seidenstrassen zwischen China und Syrien*, 1910）という著作のなかで援用することによって普及したという事情がある。これはもちろん欧米列強の政治的・軍事的な意図や政策をも含みこんだ微妙な感覚の調査でもあったのだが、いずれにせよ近代の感覚における中央アジアの最初の地理学的調査であり、その功績はきわめて大きい。たとえば日本による中央アジア調査の最初の数例（大谷探検隊など）は、こうした機運と併行している。アジアの原像は近代においてしか発見できなかったのではないか。しかもそれは、きわめて地理政治学的に、覇権主義的な空間略取のイデオロギーのもとでしか発見できなかったものではないかとの疑いをもつけれど、その詮索は、いずれ徹底的におこなおうと思っている。

ともかくその基礎固めとして、本研究会は、ユーラシア大陸の文化交渉史の流れのなかで、ともすれば「シルクロード」という近代語の流通のなかで

忘れられがちなインドの意味をあらためて考えようとしたのである。

もちろんインドは、アジアの古代文明のことを考えようとするときに抜きにできない場であるし（インダス文明）、また4000年以上も前から重要な律法制度や社会組織の整備をおこなってきた場として無視できないが、のちにマルクスなどが指摘するように、一定の停滞社会として近代の社会学などが判定してきた場であることは事実である。たとえばイギリスのインド総督府などのインド調査を通覧すると、その調査は徹底的であり、いまさら付け加えることなどないようかに見える。ところが、実際にフィールドワークをしてみると（本稿の筆者はパキスタンしか知らないが）、その地は“ terra incognita ”（未知の世界）であったのだ。知られざる世界がそこに拡がっている。われわれはこの空白の空間とどう向きあえばいいのか。それこそが本研究会の出発点であり、フィールドワークの立脚点でもあったのである。

こうした基本的な立脚点からおこなわれた多様なフィールドワークの報告については各論を見ていただくとして、その背景にはきわめて網羅的な文献調査がおこなわれていたことを報告しておきたいと思う。考古学、人類学、言語学、民俗学、民族学、美術史その他に架橋することが必要なこのような総合調査は、20年をはるかに超える蓄積をもとにはじめて可能になった。とりわけてヒングラージにかかわる現地調査は、ヒンドゥー教にかかわる調査報告でも世界で最初の詳細な報告であると思われる。その基礎調査にはわたしも参加し、その詳細を承知していることから、その重要性を強調しておきたいと思う。

ユーラシア大陸におけるインドという空間の認識は、きわめて古代にさかのぼる。インダス文明については不明な点が多いものの、4000年以上も前、この空間にきわめて高度な文明が存在していたことは、広く知られていたことと思われる。やがてインド＝ヨーロッパ語族のインド侵入がおこり、今日のインド文化の基礎となるヒンドゥー世界が築かれてゆくことになるのだが、そうした初期インド文明が広くユーラシアにネットワークを開いていたことは、多くの資料から確認することができる。

たとえば司馬遷『史記』の記述を見てみよう。あまりにも有名な文章だが、『史記』のなかの「大宛列伝第六三」には張騫（ちょうけん）の中央アジアへの旅のあらましが書きとめられている。当時の中国は前漢時代にあたるが（前２世紀）、たびかさなる騎馬遊牧民族（匈奴など）の侵入に苦慮し、やがてはその防波堤と

して万里の長城を築くことにもなるのだが、その一方で、騎馬遊牧民族との交渉のなかで遠い西方の諸国の存在を知ることにもなった。具体的には、漢の武帝が匈奴の捕虜から次のような情報を得たことがことのきっかけである。つまり匈奴の首長であった冒頓単于は中央アジアの遊牧民族国家であった大月氏を討ちやぶり、その国王の頭蓋を盃になしているというのだ。こうした屈辱的な状況から、大月氏は匈奴に深く恨みをいだいており、漢と連合して匈奴を攻撃する可能性があると考えたのである。張騫の旅のあらましは省略するが、この計略は頓挫し、彼は現在のアフガニスタン北部に数年滞在したのち、ふたたびの艱難辛苦を経て帰国することになる。こうした冒険的な西域行を終えたのち、彼が国王に上奏した内容が『史記』に記載されているわけだが、さまざまな中央アジアの状況報告とともにインドに関するさまざまな伝聞の見えることが興味ぶかい。その記述にある張騫の上奏を引く。

> 安息（パルティア）は大宛（フェルガナ）の西二、三千里ばかり、嬀水（アム・ダリア河？）の北にあります。……その西には条枝（シリア）、北には奄蔡（アルチャク）、黎軒（ローマ）などの国があります。……大夏（バクトリア）の東南には身毒国（インド）があります[1]。

いずれも今日の中央アジアに位置する場であり、カザフスタンなど南ロシア諸国から、アフガニスタンにいたる諸地域が記述され、バクトリアなどアレクサンドロス大王の築いたギリシア都市から、さらにローマからインドまで視点が拡がっていることがわかる。

ちなみに、ここでインドを「身毒」なる表記であらわしているのは、サンスクリット語で「河」を意味し、インダス河の名に由来する地域名となったシンドゥ（Sindhu）の音写である。一方、西方ではこの語からヒンドゥ（Hindu）とペルシア語化されて流通し、さらにアラビア語のヒンド（al Hind）、ギリシア語のインドスを経て英語などのインド（Inde）へと転化したものと思われる。中国では、のちの７世紀になって、玄奘三蔵が「身毒」（あるいは同様に用いられていた「天竺」「賢豆」「天篤」）などの音写は不正確であると批判して「印度」の語をあて（以前の語は「異議紛紛」をもたらすといっている）、それが今日でも用いられているわけだが、少なくとも前２世紀に中国で印度（身毒）の名称の知られていたことは確認できる。

---

(1) 司馬遷『史記』小竹文夫・小竹武夫訳、ちくま学芸文庫、第８巻、117～８頁。

さらに張騫は、王にこう語っている。

> わたくしは大夏にいた時、邛（きょう）（現在の四川省、西昌）の竹杖と蜀の布を見ました。「これをどこで手に入れたか」と聞いたところ、大夏の国人が、「わたしは商人で、身毒国に出かけて買ったのです」と答えました。身毒国は大夏の東南数千里ばかりにあり、その風俗は土着し、大夏とすこぶる似て暑くて湿気が多いということです。その人民は象に乗って戦争し、その国は大きな河に臨んでいます[2]。

張騫がアフガニスタンで聞きとったインド情報がどのようなものであったのか、これ以上は知りうるところではないが、中国南部の文物がインド経由でアフガニスタンにまで達しているのだから、すでにユーラシアの東半分に盛んな人的・物的交流のあったことは容易に想像できるだろう。2000年以上も前から、すでにインドは東西文明の重要な結節点だったのである。

時代をくだって唐代になると、インドと東アジアとの交流はさらに拡大する。玄奘三蔵の例を引くまでもなく、外国への渡航は国禁とされてはいたものの、さまざまな物品が中国をはじめとする東アジアに到来し、間接的であるとはいえ、その道はすでにローマに達していた。その東西を通ずる道を動かしていたのは主にアラビア人であり、ダウと呼ばれる巨大な船をあやつる貿易商たちの経営する街が唐代の中国に多くあったと伝えられているが[3]、インド洋経由でやって来る彼らから多くの情報が流れこんでいたことは想像にかたくない。

> ７世紀から９世紀にかけて、インド洋は安全で豊かな海でありつづけ、あらゆる国の船で満ちていた。アラビア海はイスラーム勢力によって守られ、アッバース朝以降の首都がダマスカスからペルシア湾にほど近いバグダードに移ると、港は首都に近接することになったが、最大級の船舶はこの港に停泊することができなかった。そこでペルシア帝国期の古い港、都市バスラに接するウブラーが活用されるようになった。だが、なによりも盛んな交易のおこなわれた港は、シーラーズに近接するペルシア湾岸のシーラーフであった。この街は西方貿易であつかうあらゆる

---

(2) 同書、118頁。
(3) 桑原隲蔵『蒲寿庚の事蹟』東洋文庫、平凡社。

品々を集積し、977年に起こった地震で街が壊滅するまで東西交易の中心地でありつづけた。この街の住民はペルシア人が主であったが、アラブ人の真珠採りがおり、あるいはメソポタミア、オマーンからやってきた冒険的な商人たちもいて、インドから中国へと渡る船を運行させていた[4]。

インドと東アジアとは、すでに2000年をはるかに超える交流史を形成していたのである。

インドと西方との交渉は、さらに時代をさかのぼる。ヘロドトスの『歴史』によれば、

［ペルシア帝国の王］ダレイオスがその治世中［前522年～486年］、側近のギリシア人を呼んで、どれほどの金を貰ったら、死んだ父親の肉を食う気になるか、と訊ねたことがあった。ギリシア人は、どれほど金を貰っても、そのようなことはせぬといった。するとダレイオスは、今度はカッラティアイ人と呼ばれ両親の肉を食う習慣をもつインドの部族を呼び、先のギリシア人を立ち会わせ、通弁を通じて彼らにも対話の内容が理解できるようにしておいて、どれほどの金を貰えば死んだ父親を火葬にすることを承知するか、とそのインド人に訊ねた。するとカッラティアイ人たちは大声をあげて、王に口を謹んで貰いたいといった。慣習の力はこのようなもので、私にはピンダロスが「慣習（ノモス）こそ万象の王」と歌ったのは正しいと思われる[5]。

などといったインド人およびインドの地理に関する記述が多く見られる。すでにペルシアがインドと深く交渉していたことがこの記述から見てとれよう。ちなみに、アレクサンドロス大王がインド北西部に進攻し、象部隊を指揮するインドのポロス王の軍勢を打ち破ったのは前327年のことである。大王がインドをめざしたのは、すでに多くの情報をもっていたからにほかならない。無数の名も知れぬ交易者がすでにインドと西方との往還をなしていたのだ[6]。

――――――――――――――――――

(4)　Edward H. Schafer, *The Golden Peaches of Samarkand : A Study of T'ang Exsotics*, University of California Press, 1963, p.12. 唐代の中国に招来されたさまざまな異国の物産について論じたこの書には、インドを通じた西方との交易情報が頻発する。

(5)　ヘロドトス『歴史』松平千秋訳、岩波文庫、上巻、307頁。このギリシア最古の歴史書にもインド情報は頻発する。

ここでは「東西交渉史研究会」がおこなったフィールドワークの古層をなす、インドの発見と交渉の歴史を簡単になぞってみたが、インドに言及する文献こそ数多いものの、その実態はまだまだ謎に満ち、奥深い。今後も考古学的、地理学的、文化史的な調査が要望されるところである。

――――――――――――――――――

(6) ここではインドと西方との交渉についてこれ以上は言及しないが、たとえば次のような文献が参考になる。*Rome and India : The Ancient Sea Trade,* ed. by Vimala Begley and Richard Daniel de Puma, The University of Wisconsin Press, 1991. また、エジプト在住のギリシア人の手になるものと思われる海上貿易の案内書が紀元60～70年ころに成立している。すなわち『エリュウトゥラー海案内記』村川堅太郎訳註、中公文庫、である。これは紅海における海路の案内だが、そのルートは当然インドにつながっている。